

# 明治期における〈てくれ〉の尊敬表現

— 「～てください」、「お（ご）～ください」、「～ておくんない」 —

山 田 里 奈

## 1. はじめに

稿者は、江戸後期における〈てくれ〉の尊敬表現の使用についてまとめた際<sup>(1)</sup>、現代語で一般的に使用されている「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」（「お～なさってくださいまし」「いらっしゃってくださいまし」等をまとめて指す）は高い敬意を表すために用いられるが、「尊敬語・尊敬表現形式+てください」はあまり使用されないことや、「お～くださいまし」「お～ください」は限定的な使用に留まっていること等を述べた。そして、これらの表現が一般的に用いられるようになる要因の一つについて、尊敬命令形（「お～なさいまし」、「お～なさい」等）の用法変化（〈依頼〉と〈勧め〉の両用から〈勧め〉専用へ）の影響があるのではないかと指摘した（後述）。しかし、この江戸後期の考察ではいくつかの表現の発達の兆しを指摘するに留まっている。江戸後期の考察を踏まえて、それに続く明治期の使用を考察し、これらの表現の一般化の要因についても考える必要がある。そこで本稿では、江戸後期からの変遷という視点を持ちながら、明治期における〈てくれ〉の尊敬表現の使用について、明らかにしていきたい。

## 2. 先行研究

以下、明治期の使用について明らかにされていること、江戸後期の使用とのつながりについて明らかにされていることを確認していこう。

### 2.1 明治期における〈てくれ〉の尊敬表現

明治期における〈てくれ〉の尊敬表現の研究には、通時的な研究として工藤真由美（1979）、共時的な研究として陳慧玲（2006 他）等がある。

まず、工藤（1979）についてであるが、これは、江戸後期から昭和期までの〈てくれ〉の尊敬表現のバリエーションの変遷を明らかにしたものである。その中で、各時期の表現を「ていねいさ」によって順に列挙した表を作成しているが、「第一期<sup>(2)</sup>」の表は提示しておらず、「第一期」に見られた「てくんねへ」「てくんなせへ」「てくりや」「お～なすってくださいませ」等が「第二期」までには使用がほとんど見られなくなると述べるに留まっている。中でも「お～なすってくださいませ」（本稿でいう「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」）は論文中のどの表にも記載がないため、どのよう

に用いられ、用例が減少していくのかを追いにくなっている。また、調査対象資料を見ると、明治20年から25年までの資料があまり扱われていない<sup>(3)</sup>。これに対し、陳（2006 他）は明治初年から末年までの資料を対象とし、「どのような命令表現があり、位相的にどのような特性を持っているのか」ということと、「それらの命令表現が、明治期において、どのような変遷を遂げるかということについて見通しをつける」ということを目的として考察を行っている。陳（2006 他）は、本稿とかなり似た研究であるが、命令表現すべてを対象としているためか、「尊敬表現形式+てください（まし）」の用例は「お～ください（まし）」として扱っており、2表現の使用の違いは明らかにされていない。江戸後期において用い方が異なる<sup>(4)</sup>「尊敬語・尊敬表現形式+てください（まし）」と「お～ください（まし）」はそれぞれ別々に扱い、どのように用いられているのかを考察する必要があるだろう。

## 2.2 江戸後期からのつながり

「1. はじめに」で触れたが、江戸後期の使用については、山田（投稿中）でまとめた。江戸後期では、「尊敬語・尊敬表現形式+てください」の用例数が少ないことや、「お～くださいまし」、「お～ください」が限定的に使用されることなどの特徴が見られた。また、これらの表現が一般化していく要因の一つとして、尊敬命令形の用法変化が形式ごとに異なることが影響していることを指摘した。尊敬命令形のうち、高い敬意を表す表現ほど、その用法は〈依頼〉〈勧め〉の両用から〈勧め〉専用への変化が進んでいたこと<sup>(5)</sup>、これを補うために、高い敬意を表す〈てくれ〉の表現—「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」、「お～くださいまし」—が必要とされるようになったのではないかということである。しかし、江戸後期の考察では、各表現の特徴を説明し、発達の兆しを指摘する段階までしか明らかにしていない。明治期の使用と尊敬命令形の用法縮小の影響について説明することにより、より現代語とのつながりを示すことができるのではないかと考えられる。

## 2.3 問題の所在

以上、〈てくれ〉の尊敬表現について先行研究を見てきた。考察すべきことをまとめると以下のようになる。

- ア 明治20年前半の資料を含めた〈てくれ〉の尊敬表現の使用状況。
- イ 「尊敬語・尊敬表現形式+てください（まし）」と「お～ください（まし）」の使用について。
- ウ 尊敬命令形の用法縮小との関わりによる変化の様相。

以下、第3節で考察方法について述べ、第4節でア、イについて、用例数分布表と具体例を見て考察を行い、第5節でウに関して用法からの考察を行い、第6節でまとめる。

## 3. 考察方法

本稿では〈てくれ〉の尊敬表現を、主として身分関係による上下関係で分けたときに、どのように分布しているのかを知るための表を作成し、それを参照しながら考察を行う。この用例数の分布を明示し

た表を「用例数分布表」と呼ぶ。用例数分布表は、階層による分布の違いを知るために階層ごとに作成する。また、話し手と聞き手の上下関係以外に話し手の性別、聞き手の性別によって下位分類する。

【用例数分布表の作成にあたって】以下、上下関係や階層について説明する。

- 用例数分布表の縦軸となる上下関係は、基本的には、社会的身分によってA〈下→上〉の関係、C〈上→下〉の関係（主従関係、身分差）、B〈対等〉の関係（身分差なし）に3分類する（用例にはA、B、Cと記す）。なお、親疎関係によって単なる上下関係では判断できない例は説明を加える。
- ただし、身分関係で分類するとCの関係であるが、謝罪や懇願しているときの例であるため、Aの関係、Bの関係に分類した例もある。
- 用例数分布表は、階層ごと（中流以上の人々、下層の人々、芸妓（遣手、禿も含む））に分ける。
- 「ごめんください（まし）」などの謝罪、挨拶の表現として用いられた例、話し手や聞き手の身分や上下関係がわからない例は考察の対象から外した。

用例数分布表中、B〈対等〉の関係以上で用いる形式を高い敬意を表す尊敬表現形式であると認める。考察では、B〈対等〉の関係をさらに、年齢差や性差、立場による上下関係、互いに用いる表現の違いなどから、Ba〈話し手が聞き手よりも高い敬意を表す表現を用いる場合〉、Bb〈互いに似た表現を用いる場合〉、Bc〈話し手が聞き手よりも低い敬意を表す表現を用いる場合〉に分ける。調査対象資料は、明治初年から30年までの資料を扱う。各資料の詳細は最後の頁にまとめている。各資料に付した下線部を省略形とし用例には下線部のみを記す。

## 4. 調査結果

以下、調査結果について見ていくが、考察の際、明治初年から明治20年まで（以下、「明治前期」）と明治20年から明治30年まで（以下、「明治後期」）では〈てくれ〉の尊敬表現のバリエーションが異なるため、時期による違いという点も考慮しながら見ていくこととする<sup>(6)</sup>。

### 4.1 全体の傾向

まず、次頁の【表1】「全体の傾向」からわかることと先行研究で述べられていることの確認を行う。

- 明治期における「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」は、江戸後期とほぼ同じくらいの割合で用いられている。「尊敬語・尊敬表現形式+ください」は、江戸後期ではほとんど用例が見られなかったが、明治期には前期、後期ともに一定数の用例が得られるようになっている<sup>(7)</sup>。
- 「～てくださいまし」は、江戸後期から引き続き用いられている。「～ください」は、明治期になると全体の20%以上を占めるようになることから、当期一般的に用いられていたことがわかる。
- 「お～くださいまし」は「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」「～てくださいまし」との差が縮まっている。「お～ください」の使用増加は、湯沢（1954）や工藤（1979）の指摘と一致している<sup>(8)</sup>。

表1 全体の傾向

表現/時期	江戸後期		明治前期		明治後期	
尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし	75	11.3%	33	8.1%	16	8.9%
尊敬語・尊敬表現形式+ください	2	0.3%	17	4.2%	7	3.9%
～てくださんせ	3	0.5%	2	0.5%	0	0.0%
～てくださいまし	47	7.1%	41	10.0%	9	5.0%
～てくだされ	16	2.4%	14	3.4%	1	0.6%
～てください	14	2.1%	104	25.5%	56	31.3%
～てくだせへ	24	3.6%	4	1.0%	0	0.0%
お～くださいまし	16	2.4%	19	4.7%	9	5.0%
お～くだされ	5	0.8%	4	1.0%	0	0.0%
お～ください	1	0.2%	16	3.9%	10	5.6%
お～くだせへ	1	0.2%	1	0.2%	0	0.0%
～ておくんないまし	12	1.8%	1	0.2%	0	0.0%
～ておくんない	54	8.2%	25	6.1%	10	5.6%
～ておくんない	25	3.8%	6	1.5%	0	0.0%
～ておくんないせへ	32	4.8%	14	3.4%	0	0.0%
～ておくれ	133	20.1%	67	16.4%	34	19.0%
～てくんないはまし	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
～てくんない	4	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
～てくんないせへ	19	2.9%	16	3.9%	1	0.6%
～てくれたまへ	0	0.0%	18	4.4%	26	14.5%
～てくりや	22	3.3%	1	0.2%	0	0.0%
～てくりやれ	2	0.3%	3	0.7%	0	0.0%
～てくれさっせへ	4	0.6%	0	0.0%	0	0.0%
～てくだし	54	8.2%	0	0.0%	0	0.0%
～ておくんないせえし	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
～ておくんないせんし	1	0.2%	0	0.0%	0	0.0%
～ておくんないまし	21	3.2%	0	0.0%	0	0.0%
～ておくんないんし	54	8.2%	2	0.5%	0	0.0%
～てくんないまし	13	2.0%	0	0.0%	0	0.0%
～てくんないんし	6	0.9%	0	0.0%	0	0.0%
合計	662	100.0%	408	100.0%	179	100.0%

○「～ておくんないまし」の使用は、ほとんど見られなくなっている。本調査では、次の1例のみが見られた。これは、女主人のお国から草履取りの孝助に対して用いられた例である<sup>(9)</sup>。

(例1) どうか勸弁しておくんないましヨ。(中流女性→草履取)【A〈謝罪〉】『牡』第十三回84]〈M17〉

当期,「お～ないまし」が一般的に用いられたことから考えると、これは〈てくれ〉の尊敬表現という枠組みを設けたときに現われる特徴である。

○ 上記に挙げた表現の音訛形で、江戸後期から明治期にかけて用例が見られなくなる表現としては、「～てくだされ」、「～てくだせへ」、「～てくださんせ」、「～ておくんなせへ」、「～ておくんはない」が挙げられる。これは、工藤（1979）や陳（2006 他）が述べる通りである<sup>(10)</sup>。

以上、本稿の考察対象「尊敬語・尊敬表現形式+てください（まし）」、「～てください（まし）」、「お～ください（まし）」、「～ておくんない」（【表 1】で網掛け箇所）について、江戸後期からの全体の傾向を確認した。次節では具体的な用例から詳しい使用について考える。

#### 4.2 各表現形式の使用実態—階層差、性差からの考察

第 3 節で述べた基準に従って作成した用例数分布表が次の【表 2, 3】である。

表 2 明治前期の用例数分布表

上下関係	中流以上の人々の使用												下層の人々の使用												芸妓の使用								
	A〈下→上〉				B〈対等〉				C〈上→下〉				A〈下→上〉		B〈対等〉		C〈上→下〉		A	B	C												
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	女性	女性	女性	計										
話し手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	女性	女性	女性	計										
表現形式\聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	男性	女性	男性	女性	計									
(1) 尊敬語・尊敬表現+てくださいまし	3		3	1	1		6	2							1				13	4				4									
(2) 尊敬語・尊敬表現+てください	4				4	1							5	1	1				7	1				1									
(3) ~てくださいまし	3		9		2		10	1					1	6		3	2		12	3		1		4									
~てくだされ						1	2		5	1			4						4	1				1									
(4) ~てください	4		6		13	4	14		7	13	1		62	3	1	5	1	2	1	2	5	20	19	1	2	22							
~てくだせへ													0	4					4					0									
~てくださんせ													0			1			1	1				1									
(5) お～くださいまし	6	1	5				3						15	1	3				4					0									
お～くだされ						3							3		1				1					0									
(6) お～ください	5				5	1							11	4					4	1				1									
お～くだせへ													0	1					1					0									
~ておくんないまし			1										1						0					0									
(7) ~ておくんない	2					1	3	1	1	1	1	1	10		2				9	4	1	1		6									
~ておくんはない													0		1		1	1	3	2		1		3									
~ておくんなせへ	2				2				1				5	1	1		6	1	9					0									
~ておくんなんし													0						0			1	1	2									
~ておくれ					7	2	8	3	7	7	9	13	56	1			1	3	1	4	1	11				0							
~てくんなせへ									3				3						13					0									
~てくれたまへ					18								18						0					0									
~てくりやれ						3							3						0					0									
~てくりや													0			1			1					0									
合計	29	1	24	1	55	12	47	7	24	21	10	15	246	33	3	22	2	18	9	9	16	3	0	0	1	117	35	3	1	5	0	1	45

表3 明治後期の用例数分布表（※明治後期に用例が見られなくなった表現は表から省略）

上下関係	中流以上の人々の使用											下層の人々の使用											芸妓の使用			計									
	A (下→上)				B (対等)				C (上→下)			A (下→上)				B (対等)				C (上→下)			計												
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	女性	女性		女性											
話し手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	女性	女性	女性	計											
表現形式\聞き手の性別	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	計	男性	女性	男性	女性	計										
(1) 尊敬語・尊敬表現+てくださいまし		2			8	4					14			2						2					0										
(2) 尊敬語・尊敬表現+てください	1				3	1	2				7									0					0										
(3) ~てくださいまし			1		1	2	2				6		1	2						3					0										
~てください											0				1					1					0										
(4) ~てください					4	31	5	4	3		47		1	1		2				4	5				5										
(5) お~くださいまし		3			1	1	4				9									0					0										
(6) お~ください					3	5	1				9			1						1					0										
(7) ~ておくんない						4	3				7									0	3				3										
~ておくれ					4	1	5	1	1	2	11									0	2	7			9										
~てくんなせへ											0				1					1					0										
~てくれたまへ					26						26									0					0										
合計	1	0	6	1	34	45	23	24	4	1	2	11	150	0	0	2	6	0	0	4	0	0	0	0	0	12	10	0	7	0	0	0	0	17	合計 179

## (1) 「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」

「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」は尊敬語や尊敬表現形式に〈てくれ〉の尊敬語「てくださいまし」が接続するという構造からもわかるように、高い敬意を表す。その使用を明治前期と明治後期で比較すると、使用される関係の範囲の広がりを指摘することができる。

(例2) 其処へお出のは何方様が存じませんが外国人に捕まつて難儀をするものお助けなすつて下さいまし。(中流女性→侍) 【A】『雨』第十一回 335] 〈M9〉

(例3) 兄様は御勉強なさるなら、為すつて下さいまし。(中流女性・義理の妹お島→中流男性・義理の兄柳之助) 【Ba】『多』102] 〈M29〉

例2は明治前期の例であり、中流女性から侍に対して用いられた身分によるAの関係の例である。例3は明治後期の例であり、義妹から義兄に対して用いられたBaの関係の例である。明治前期では話し手と聞き手の上下関係に大きな差がある場合にしか用いられなかったが、明治後期では兄妹間でも用いるようになる<sup>(11)</sup>。

## (2) 「尊敬語・尊敬表現形式+てください」

「まし」を下接しない「尊敬語・尊敬表現形式+てください」は、4.1で確認したように、明治期になると江戸後期よりも用例数が多く見られるようになる。そしてこれは明治期を通して、前述の「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」と同様、高い敬意を表す場合に用いられる。

(例4) 旅費は扱置き宿料も奇麗にお拂ひなさつた上お立なすつて下さい。(中流男性・宿の主人→中流男性金之助) 【Ba】『金』135] 〈M11〉

（例5）貴方には是から又長く僕はお世話になりたいのですから、何でも遠慮無く有<sup>おっしゃつ</sup>仰つて下さいな。（中流男性柳之介→中流女性お種）【Bb】『多』六294〈M29〉

（例6）それでは、何卒貴方も沢山悪口を<sup>おっしゃ</sup>有仰つて下さい。（中流女性お種→中流男性柳之助）【Bb】『多』八314〈M29〉

例4は宿の主人から客である中流男性金之助に対して用いられたBaの関係の例である。例5、6は中流男性柳之助と中流女性お種が互いに「おっしゃってください」を用いたBbの関係の例である。互いに丁寧な言葉づかいで話すときに用いられている。どちらもBの関係以上で用いられていることから高い敬意を表す表現であると認められる。明治後期に、(1)の「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」が兄妹間（例3）で用いられるようになると述べたが、これにつれて、「尊敬語・尊敬表現形式+てください」も丁寧な言葉づかいで互いに話す場合に用いるようになったと考えられる。

### (3) 「～てくださいまし」

「～てくださいまし」について見ていく。陳（2007）では「～てくださいまし」について、「全ての階層の男女→目上か同等の親しい相手」に対して用いられたと説明している。Bの関係以上で用いられたという点では本調査の結果と一致している。ただし、陳（2007）では、「親しい相手」を「親子、夫婦、兄弟、親戚、友達、主人と奉公人等」と説明しているが、本調査の明治前期、明治後期に見られた中流以上の人々の使用と下層の人々の使用では、これに当てはまらない例が見られた。

（例7）アノ旦那様がなんだか鳥渡お目にかゝりたいからと仰いますからどうぞ庭の開きから入<sup>はいっ</sup>て下さいまし。（下女→下層男性久八）【A】『鹽』362〈M18〉

（例8）虚言だと思ひなさいますなら、二階にお行でなすつて、見て下さいまし。（茶屋の女中お花→中流男性三吉）【A】『波』320〈M29〉

例7は下女から客である久八に対して用いられた例である。初対面であること、久八は主人によって呼び出された客であることから、親しい間柄ではない。例8は女中のお花から客の三吉に対して用いられた例である。この例も、自分が探している人が居るのではないかと怒りながら入ってきた三吉に対して用いていることから、親しい間柄とはいえない。もっと広い人間関係で高い敬意を表す場合に用いられたと考えてよいだろう。ただし、芸妓の使用は用例数が少ないためだろうか、親しい相手に対して用いられた例のみ見られた。次の例9は芸妓お濱から情人に対して用いられている。

（例9）お見捨なされずいつ迄も可愛がつて下さいまし。（芸妓お濱→中流男性赤井）【A】『巷』第十回161〈M12〉

従って、「～てくださいまし」は明治期を通して、下層の人々と中流以上の人々の使用では、親しい間柄の聞き手に対して用いる場合とそうではない場合が見られ、高い敬意を表すときに一般的に用いられた表現であると捉えられる。一方、芸妓の使用は親しい聞き手に対して用いられる。

### (4) 「～ください」

「～ください」の使用は、陳（2007）の「全ての階層の男女→目上か同等か目下の親しい相手」に対して用いられるという説明とほぼ一致する結果が得られた。ただ、本調査では階層による違いが

見られる。それは、中流以上の人々だけがCの関係で用いており、使用される関係の範囲が異なるという点である。Cの関係で用いる場合、明治期を通して、丁寧な言葉づかいとして用いられている。

（例10）一台は二人乗をいひつけてください。（中流男性守山→女中）【C】『当』第八回99〈M18〉

例10は車を呼ぶように頼んでいるため、聞き手に対してぞんざいな態度を取っているわけではない。

また、明治前期に見られる中流以上の人々のAの関係における使用には、資料による偏りを指摘することができる。いずれも三遊亭円朝による『怪談牡丹燈籠』（M17）と『鹽原多助一代記』（M18）の例であった。次の例11は初対面の聞き手に対して、金を要求しているところで用いられている。

（例11）サア貸して下さい。貸せないかいへ。（中流男性宇之助→百姓角右衛門）【A】『鹽』193〈M18〉

例11は金の工面に困って懇願している場面であるため、Aの関係としたが、他の資料では、Bの関係で用いられていることから、明治期では、Bの関係以下で用いられるのが一般的であったと考えられる。

#### (5) 「お〜くださいませ」

「お〜くださいませ」は、江戸後期の使用では用例が少ないこと（湯沢（1954）、辻村（1968）、工藤（1979）、山田（投稿中））、高い敬意を表すこと、話し手と聞き手の関係の範囲が狭いこと（山田（投稿中））がわかっている。それが明治期になると、使用される関係の範囲に広がりが見られるようになる。以下の例は下層の人々の例である。

（例12）どうぞ御<sup>あらた</sup>検め下さいまし。（女中→主人飯島平左衛門）【A】『牡』第十一回71〈M17〉

（例13）一寸お逢はせ下さいまし。（飛脚→店にいる者たち）【A】『浅』307〈M15〉

例12は明治前期の例で、女中から主人に対して、持ち物を主人が点検するという改まった場面で用いられている。これは江戸後期の主従関係によるAの関係で用いられるという傾向と一致している。例13も明治前期の例で、飛脚から店にいる者たちに対して用いられた例である。例13では江戸後期や例12に見られたような偏り（聞き手が侍や役人、主従関係によるAの関係等）が見られなくなっている。また、次の例14のように中流以上の人々の使用には、明治後期に近づく頃、普通の会話で用いられた例が見られる。

（例14）叔父さん、マア一度其の紙面をお見せ下さいませ。（中流女性・姪お春→中流男性・伯父藤井権兵衛）【Ba】『雪』下篇第四回150〈M19〉

例14は姪から伯父に対して用いられた例である。普通の会話で「お〜くださいませ」が用いられ、場面による制約は見られない。江戸後期から明治前期にかけて、次第に使用される関係や場面の制約がなくなり、普通の会話で用いられるようになるのである。

#### (6) 「お〜ください」

「お〜ください」は、「お〜くださいませ」と同様、江戸後期に用例が少ないこと（湯沢（1954）



辻村（1968）、工藤（1979）、山田（投稿中）がわかっているが、明治期になると一般的に用いられるようになる（4.1）。階層による違いは、中流以上の人々の使用において使用される関係の範囲に変化が見られることである。中流以上の人々の使用では、明治前期にAの関係で用いる例が見られるが、明治後期になると見られなくなるのである。以下の例15、16を見てみよう。

（例15）不束ながら片時も殿様のお側を放さずお置下さい。（草履取りの孝助→主人飯島平左衛門）

【A】『牡』第七回42〈M17〉

（例16）貴方あなたももうお寝みやす下さい。（中流男性鷺見柳之助→中流女性種子）【Bb】『多』176〈M29〉

例15は明治前期の例であり、草履取りの孝助から主人の平左衛門に対して用いられた主従関係によるAの関係の例である。例16は明治後期の例であり、中流以上の人々がBbの関係で用いている。明治後期ではこのようなBbの関係以下で用いられる例が中心となる。(5)で「お〜くださいませ」が明治後期にBbの関係以上で普通の会話で用いられるようになる」と述べた。「お〜くださいませ」の使用が一般化し、Bbの関係以上で用いられるようになるため、「お〜ください」はBbの関係以下で用いられるようになっていったと考えられる。

(7)「〜ておくんさい」

「〜ておくんさい」について見ていく。陳（2007）では「親しい相手」に対して用いられると説明しているが、本調査では、親しい間柄で用いられるという指摘に加えて、使用範囲の縮小も指摘したい。以下の例17は明治前期の例である。親しい間柄で用いられている。

（例17）モシ関取ちよつと目を覚くしてお呉んなさい。（中流女性・妻お増→関取・夫吉三郎）【Ba】

『雨』第五回321〈M9〉

例17は妻から夫に対して用いられた例である。夫婦であり親しい間柄である。次の例18、19は明治後期の例である。親しい間柄で用いられているが、明治前期に比べて話し手が限定的になる。

（例18）此度文さんヨーク腹に墜ちるやうに言くって聞かせてお呉んなさい。（中流女性お政→中流男性文三）【Bc】『雲』第四回19〈M20〉

（例19）弁さん、待つてお呉んなさいよう。（芸妓お勝→中流男性情人弁三）【A】『波』313〈M29〉

例18は中流女性から居候している中流男性に対して、例19は芸妓から情人に対して用いられた例である。これらの例以外の例でも「〜ておくんさい」を用いるのは年配の女性を中心であった。明治前期までの使用では話し手の年齢は関係なく親しい間柄で使用されていたのと比べると偏ることを指摘できる。また、明治後期に「〜ておくんさい」を用いる女性は、明治期に「お〜だ」を多用する人物<sup>(12)</sup>でもある（10例（【表3】中の中流以上の人々の使用7例、芸妓の使用3例を合わせた用例数）<sup>(13)</sup>中6例）。さらに、これらの例は、身内で用いられる例に偏っている（10例中7例）。

#### 4.3 明治期における〈てくれ〉の尊敬表現のまとめ

以上、「尊敬語・尊敬表現形式+てください（まし）」、「〜てください（まし）」、「〜ておくんさい」について、全体の傾向と用例数分布表、具体的な用例からの考察を行ってきた。まとめると次の

【表4, 5】の体系表のようになる。

表4 明治前期

明治前期 尊敬表現形式／上下関係	中流以上の人々の使用					下層の人々の使用					芸妓の使用				
	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)
		Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc	
尊敬語・尊敬表現形式 +てくださいまし	○	○	○			○		○			○				
尊敬語・尊敬表現形式 +てください	○	○	○			○					○				
～てくださいまし	○	○	○			○	○	○			○	○			
～てください	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○		○		
～てくださいへ						○									
お～くださいまし	○	○				○									
お～ください			○	○		○									
お～ください	○	○	○	○		○					○				
～ておこなさいまし	○														
～ておこなさい	○		○	○	○	○	○	○			○	○			
～ておこなせへ	○		○	○	○	○	○	○							

表5 明治後期

明治後期 尊敬表現形式／上下関係	中流以上の人々の使用					下層の人々の使用					芸妓の使用				
	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)	A (下→上)	B〈対等〉			C (上→下)
		Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc			Ba	Bb	Bc	
尊敬語・尊敬表現形式 +てくださいまし	○	○	○			○									
尊敬語・尊敬表現形式 +てください	○	○	○												
～てくださいまし	○	○	○			○									
～てください		○	○	○	○	○	○				○				
～てくださいへ															
お～くださいまし	○	○	○												
お～ください			○	○		○									
～ておこなさいまし															
～ておこなさい		○	○	○							○				
～ておこなせへ															

ここまで、江戸後期に発達の兆しが見られた「尊敬語・尊敬表現形式+てください」と「お～くださいまし」、「お～ください」の使用が一般化する様相を、関連する表現とともに述べてきた。この一般化する要因として、江戸後期の考察では、尊敬命令形の用法変化（〈依頼〉と〈勧め〉）の両用から〈勧め〉専用へ）を挙げた。用法の変化に伴って高い敬意を表す尊敬表現が必要とされたのではないかと考えたためである。次の第5節ではこの用法の変化という点から明治期の使用を考えたい。

## 5. 用法からの考察

ここでは、用法の変化という観点から変化の要因を探りたい。江戸後期と明治期の尊敬命令形の用法は次の【表6】のような分布を示している。

表6 尊敬命令形の用法による用例数の分布

尊敬表現形式	江戸後期					明治前期					明治後期																			
	依頼	勧め	恩惠的指示	命令的指示	合計	依頼	勧め	恩惠的指示	命令的指示	合計	依頼	勧め	恩惠的指示	命令的指示	合計															
お～あそばしまし	2	17%	10	83%	—	—	—	—	12	100%	0	0%	3	100%	—	—	—	—	3	100%	0	0%	2	100%	—	—	—	—	2	100%
お～あそばせ	6	33%	12	67%	—	—	—	—	18	100%	6	35%	11	65%	—	—	—	—	17	100%	4	44%	5	56%	—	—	—	—	9	100%
お～なさいまし	36	31%	82	69%	—	—	—	—	118	100%	3	17%	15	83%	—	—	—	—	18	100%	4	11%	31	89%	—	—	—	—	35	100%
お～なさい	45	38%	53	45%	9	8%	12	10%	119	100%	40	45%	48	55%	6	7%	2	2%	88	100%	9	26%	19	54%	3	9%	4	11%	35	100%
お～なせへ	9	21%	21	50%	12	29%	0	0%	42	100%	3	18%	14	82%	0	0%	0	0%	17	100%	0	0%	1	100%	0	0%	0	0%	1	100%
お～動詞連用形	44	22%	39	20%	64	32%	51	26%	198	100%	5	45%	4	36%	2	18%	0	0%	11	100%	2	13%	2	13%	9	56%	4	25%	16	100%
～なさい	1	4%	2	8%	17	71%	4	17%	24	100%	2	8%	0	0%	21	88%	1	4%	24	100%	0	0%	0	0%	3	75%	1	25%	4	100%
～なせへ	7	6%	34	27%	59	48%	24	19%	124	100%	22	32%	18	26%	19	28%	9	13%	68	100%	1	100%	0	0%	0	0%	0	0%	1	100%
合計	150	23%	253	39%	161	25%	91	14%	655	100%	81	33%	113	46%	48	20%	12	5%	246	100%	20	19%	60	58%	15	15%	9	9%	103	100%

この【表6】は、〈てくれ〉の尊敬表現ではなく、尊敬命令形を用法によって分類した表である。分類方法は、森勇太（2010）を参考にしている<sup>(14)</sup>。本稿でいうA〈下→上〉の関係またはBa〈話し手が聞き手よりも高い敬意を表す表現を用いる場合〉の関係、かつ、受益者が「非聞き手」である場合を〈依頼〉、受益者が「聞き手」である場合を〈勧め〉、本稿でいうC〈上→下〉の関係またはBc〈話し手が聞き手よりも低い敬意を表す表現を用いる場合〉の関係、かつ、受益者が「非聞き手」である場合を〈命令的指示〉、受益者が「聞き手」である場合を〈恩惠的指示〉とする。以下、各用例を挙げる。

〈依頼〉早く話してお遣なさいましな。(中流女性妻→中流男性夫)【Ba】[『二』上之巻223]

〈勧め〉阿嬢様、涙、ハンケチでお拭きあそばせよッ。(乳母→女主人阿輝)【A】[『空』第八回110]

〈命令的指示〉一唱弾ておきかせなさいヨ。(中流男性水澤→下層女性お辻)【C】[『妹』第一回165]

〈恩惠的指示〉何か質問があるなら何んなりお聞なさい。(教師→生徒)【C】[『緑』発端雪の下萌254]

【表6】から、高い敬意を表す尊敬表現形式「お～あそばしまし」、「お～あそばせ」、「お～なさいまし」が、〈依頼〉と〈勧め〉の両用から〈依頼〉を表しにくくなり、〈勧め〉へと移行する傾向が江戸後期よりも進んでいることがわかる。高い敬意を表す尊敬命令形が〈勧め〉に移行することによって、高い敬意を表す〈依頼〉の表現が欠ける状態になっているのである。この高い敬意を表す表現が欠けた状態を補う表現として、「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」「お～くださいまし」「～てくださいまし」の使用が一般化していったと考えられる。これらの高い敬意を表す表現が一般的に用いられるようになり、「まし」を下接しない「尊敬語・尊敬表現形式+ください」や「お～

ください」も使用されるようになっていったと考えられる。

## 6. まとめ

以上、今まで述べてきたことをまとめる。

○尊敬語・尊敬表現形式+てください(まし) この形式は、各階層に共通して高い敬意を表す。工藤(1979)では、明治20年以降に衰退すると指摘しているが、本調査では一定数の用例が見られており、明治20年代の段階では衰退する傾向は見られなかった。また、「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」は、明治前期では江戸後期の使用の特徴—主従関係などの上下関係に大きな差がある場合にしか使用されない—も残されていたが、明治後期になると兄妹間やBbの関係でも使用が見られるようになり、使用される人間関係の広がりが認められた。

○～てください(まし) 「～てくださいまし」は、先行研究において「親しい相手」に用いられるという説明がされていたが、本調査でこの特徴が当てはまるのは、芸妓の使用のみであった。下層の人々の使用や中流以上の人々の使用では、明治期を通して一般的に用いられた表現であると考えてよいだろう。「～てください」は中流以上の人々がAの関係からCの関係まで、下層の人々と芸妓の使用がBの関係以上で用い、「～くださいまし」よりも軽い敬意を表す場合に一般的に使用された。

○お～ください(まし) 「お～くださいまし」は、江戸後期の特徴—話し手や聞き手に制限が見られる—が明治前期には見られるが、同時に普通の会話での使用も見られるようになる。「お～ください」は明治後期になると、中流以上の人々の使用においてBの関係以下で用いられるようになる。

○～ておくなさい 「～ておくなさい」は、先行研究の指摘のように親しい間柄で用いられているが、明治後期には親しい間柄というよりもさらに使用範囲の縮小が認められ、衰退の傾向を指摘できる。

○変化の要因 江戸後期以降、尊敬命令形の用法が〈依頼〉と〈勧め〉であったものから〈勧め〉へと移行することにより、高い敬意を表す〈てくれ〉の表現が必要とされた。明治期になるとこの傾向が強まり、「尊敬語・尊敬表現形式+てくださいまし」、「お～くださいまし」、さらには「尊敬語・尊敬表現形式+てください」や「お～ください」も一般的に用いられるようになる。

## 7. 今後の課題

本稿では、明治期における〈てくれ〉の尊敬表現について、各表現の使用と尊敬命令形の用法の縮小傾向から見える変化の要因について述べてきた。依頼表現という枠組みで見たとき、他にも多様な表現が使用されている。これらとの関わりについても考える必要があるだろう。今後の課題としたい。

注(1) 山田里奈(投稿中)「江戸後期における〈てくれ〉の尊敬表現—「～ておくなさい」、「お～ください」、「～てください」—」

(2) 工藤(1979)では、「第一期」(=明治初年より明治10年代の終わりまで)と「第二期」(=明治20年代の

初めより明治末年まで)とし、「第二期」に見られる表現を表にしている。

- (3) 工藤 (1979) の調査資料は次の通りである。本調査と同じ資料は□で囲った。明治 20～25 年までの資料には下線を付した。第一期が、安愚楽鍋、西洋道中膝栗毛、沖縄対話、牡丹燈籠、当世書生氣質、雪中梅、第二期が、浮雲、あひゞき、奇遇、片恋、にごりえ、たけくらべ、金色夜叉、高野聖、牛肉と馬鈴薯、蒲団、田舎教師、野菊の墓、破戒、ふらんす物語、虞美人草、それから、門、雁、青年、心中・流行、灰燼、かのやうに、である。
- (4) この後の 2. 2 で述べている。また詳しい使用については山田 (投稿中) で説明している。
- (5) 〈依頼〉、〈勧め〉などの用語や分類方法は森勇太 (2010) を参考にしている。詳しくは本稿の第 5 節で説明している。
- (6) 明治前期と明治後期を合わせて指すとき「明治期」という。
- (7) 本調査の早い例 (対称用法かつ命令形で用いられた例に限る) は明治 3 年刊行の『西洋道中膝栗毛』であった。(例) お聞なすつて下さい。(下層男性北八→中流男性こん平) 【A】 [『西』8] 〈M3〉ただし、尊敬表現形式に「てください(まし)」が接続するといっても、明治 20 年前後に発達する「お～になる」に接続した形—「お～になってくださいまし」「お～になってください」—の使用は見られなかった。
- (8) 本調査の早い例は明治 12 年刊行の『巷説兎手拍』の例である。(例) 御出京なら御尋ね下さい。(中流男性赤井→中流男性静馬) 【Bb】 [『巷』第九回 159] 〈M12〉
- (9) 身分による上下関係で判断すると C の関係になるが、謝罪をする場面であるため、A の関係と判断した。高い敬意を表す表現として用いられていることから、表す敬意は江戸後期と大きく変わらない。
- (10) 本調査では、明治 17 年刊行の『怪談牡丹灯籠』で下層男性が用いる例が下限の例であった。
- (11) 当期、新しい表現形式として使用が拡大する「お～になる」も同じ傾向を示す。(山田 (2013))
- (12) 明治期になると、「お～だ」は母親や年配の女性が娘や年少者に対して用いる例や、芸妓が情人に対して用いる例に偏るようになる (山田 (2014))。
- (13) 『浮雲』(M20) の例 5 例、『緑蓑談続』(M21) の例 1 例、『二人女房』(M22) の例 1 例、『浅瀬の波』(M29) の 3 例。
- (14) 森勇太 (2010) は近世前期からの変遷について詳しく明らかにしたものである。

## 参考文献

- 金澤裕之 (2009) 「虎明本狂言集に見る「テ+補助動詞」による授受表現の成立過程」『国語国文』78 - 1
- 菊地康人 (1994) 『敬語』角川書店
- 工藤真由美 (1979) 「依頼表現の発達」『国語と国文学』56-1
- 田中章夫 (1957) 「近代東京語命令表現の通時的考察」『国語と国文学』34-5
- 陳慧玲 (2006) 「明治期東京語における下層男性の命令表現の考察」『文学研究論集』25
- 陳慧玲 (2007) 「明治期東京語における直接命令表現の諸相」『明治大学日本文学』33
- 陳慧玲 (2009) 「明治期東京語における士族・知識層女性の命令表現の考察」『日本近代語研究』5
- 陳慧玲 (2010) 「近代東京語の行為要求表現の種々相」『明治大学日本文学』35
- 陳慧玲 (2011) 「近代東京語における「お～なされませ系統」行為要求表現の考察」『明治大学日本文学』37
- 陳慧玲 (2012) 「近代東京語における「てくんなさい系統」行為要求表現の考察」『明治大学日本文学』38
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』東京堂出版
- 土屋信一 (1987) 「江戸共通語をめぐって」『香川大学国文研究』12 [『江戸・東京語の研究—共通語への道』勉誠出版, 2009 所収]
- 長崎靖子 (2012) 『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』武蔵野書院
- 宮地裕 (1975) 「受給表現補助動詞「やる・くれる・もらう」発達の意味について」『鈴木知太郎博士古稀記念国文学論攷』桜楓社
- 宮地裕 (1981) 「敬語史論」『講座日本語学 9 敬語史』明治書院

森勇太（2010）「行為指示表現の歴史の変遷」『日本語の研究』6-2

山田里奈（2013）「尊敬表現形式「お（ご）～になる」系の使用—江戸末期から明治20年代まで—」『近代語研究』17, 武蔵野書院

山田里奈（2014）「江戸後期における〈する・なる〉の尊敬表現—「お～なさる」系, 「～なさる」系, 「お～だ」系を中心に—」『日本語史の新視点と現代日本語』勉誠出版

山田里奈（投稿中）「江戸後期における〈てくれ〉の尊敬表現—「～ておくんさい」, 「お～ください」, 「～てください」—」

湯沢幸吉郎（1954）『江戸言葉の研究』明治書院〔増補版, 1957〕

#### 調査資料

【明治前期】『万国航海西洋道中膝栗毛』（假名垣魯文, 1870〈明3〉）, 『牛店雑談安愚楽鍋』（假名垣魯文, 1871〈明4〉）, 『胡瓜遣』（假名垣魯文, 1872〈明5〉）, 『蝸入道』（假名垣魯文, 1872〈明5〉）—『明治文學全集』（以下、『明治』）／『青楼半可通』（服部応賀, 1874〈明7〉）, 『怪化百物語』（高島藍泉, 1875〈明8〉）—『新日本古典文学大系明治編』（以下、『明治編』）／『春雨文庫』（松村春輔, 1876〈明9〉）, 『金之助の説話』（無著名（「東京繪入新聞」）, 1878〈明11〉）, 『巷説兎手柏』（高島藍泉, 1879〈明12〉）, 『嶋田一郎梅雨日記』（岡本起泉, 1879〈明12〉）—『明治』／『沢村田之助曙草紙』（岡本起泉, 1880〈明13〉）—『明治編』／『浅尾よし江の履歴』（無著名（「東京繪入新聞」）, 1882〈明15〉）—『明治編』, 『怪談牡丹灯笼』（三遊亭円朝, 1884〈明17〉）, 『鹽原太助一代記』（三遊亭円朝, 1885〈明18〉）—『円朝全集』2012, 『一読三歎当世書生氣質』（坪内逍遙, 1885〈明18〉）, 『新磨妹と背かゞみ』（坪内逍遙, 1886〈明19〉）—『明治』／『雪中梅』（末広鉄腸, 1886〈明19〉）—『明治編』

【明治後期】『浮雲』（二葉亭四迷, 1887〈明20〉）—『明治』／『ふくさつゞみ』『風琴調一節』（山田美妙, 1887〈明20〉）—『山田美妙集』2012（以下、『山田』）／『処世写真緑蓑談』（前編／続編）（須藤南翠, 1888〈明21〉）—『明治』／『空行く月』（山田美妙, 1888〈明21〉）, 『この子』（山田美妙, 1889〈明22〉）—『山田』／『細君』（坪内逍遙, 1889〈明22〉）—『明治』／『二人女房』（尾崎紅葉, 1891〈明24〉）—『明治』／『黒蜥蜴』（広津柳浪, 1895〈明28〉）, 『浅瀬の波』（広津柳浪, 1895〈明28〉）, 『五大堂』（田沢稲舟, 1896〈明29〉）—『明治編』／『多情多恨』（尾崎紅葉, 1896〈明29〉）—『紅葉全集』◎なお該当箇所について、『西』『安』は早稲田大学図書館の古典籍総合データベース（<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>）, その他の資料の一部は近代デジタルライブラリー（<http://kindai.ndl.go.jp/>）で確認した。